

## 都市化される古墳—古市・百舌古墳群を例に—

建築デザイン研究室 A00T315 田村和也

### 1. はじめに

一見、古墳は過去の事物のようである。現代都市の中で生活している僕らにとって古墳とは、うっそうと木々の茂った森であり、山である。

しかし調査を進めていくと、それらの中には墳丘の意味・機能や形を変えながら、様々な姿で現在に存在しているものがある。本論文では、そのような事例を都市化された古墳と称し、その背景を見ていく。

### 2. 研究の目的と方法

本研究では、日本最大規模の古墳群である古市古墳群と百舌鳥古墳群を研究対象とする。多様な歴史的な事物を備えながら明治期以降になってから都市化されたこの地域では、過去の観念的な構築物としての古墳は様々な様相で現在に姿を現している。しかし現在、古墳の残り方にはいくつかのパターンがあり、そこには特定のメカニズムが存在すると思われる。そこで本研究では、都市化された古墳事例を収集し、その背後に潜む要素間の関係性を分析していくことで、古墳という事物の持つ特殊な性質を明らかにしていくことが目的である。

### 3. 各時代における古墳認識と消滅

まず、古墳の消滅について見ていきたい。しかし一言で消滅と言うものの、それらは各時代の古墳の認識と密接な関係があり、その背景は様々である。古墳の築造時代において古墳は、氏族の政治的・心象的象徴であった。そのため古代の権力闘争の中で敗れた氏族の古墳は意図的に消滅させられるものもあった。しかし奈良時代になると平城宮造営時、邪魔になったいくつかの古墳は破壊されていたという史実が残っている。これらの関係性から築造後わずか2,3世紀で古墳の初期目的は忘却されていたことがわかる。

中世には墳丘上には、しばしば城郭が建てられた。また小規模古墳は戦の盾に使われていたようである。秀吉に至っては、堺の環濠を古墳の土で埋めた、または大阪城の石垣に石室の石を使用したというエピソードすらある。これらから読み取れる古墳の認識は物理的な「もの」としての墳丘の側面である。近世期、古墳の破壊はそれほど行われなかった。この時期からは古墳の陵墓治定や保護が行われるようになる。それらは幕末の尊皇攘夷や戦争期の国威発揚、日本の国政の問題と密接な関係がある。昭和期に入り市街地の拡張、戦後の動乱、高度経済成長のあおりを受け古墳の破壊は急激に進んでいく。この時期の古墳の破壊は、都市事業の犠牲になるも

の、宅地造成などの建設工事を企てる土建業者によるものとのふたつのパターンがある。

### 4. 事例の分析

事例収集については資料の揃う範囲内で、現在に墳丘を残すものから、消滅し全く墳丘を残さないものまで広範にわたって収集した。こうして収集した事例は74件である。

これらの事例の全体像をつかむためまず、以下に示すふたつの分類を行った。

a 現在、古墳の残り方によって以下の4つに分ける。

- A 古墳（モニュメンタル）として残るもの
- B 墳丘の意味・機能、形が変化して残る古墳
- C 平面形を残す古墳
- D 消滅した古墳

b 古墳の都市化に影響を及ぼしていると考えられる要素を次に示すように分類していく。

項目1 古墳に本来に備わっている物質的性能（内的要素）

項目2 古墳に対して外部からおこなわれる操作（外的要素）

項目3 古墳に関係する社会的コンテキスト（社会的コンテキスト）

以上、示した二つの分類に従い縦軸をa、横軸をbとし事例の分類表を作成し、そこから以下に示すような特徴的な事例を挙げ、要素間の関係性を分析し

残り方	名称	項目1	項目2	項目3	現状
A	河内大塚山古墳	表1	事例の分類	陵墓参考地指定	山林
B	高塚山古墳	形態・配置関係	近鉄南大阪線	文化財としての古墳	断面のみ残る
B	応神陵跡・善所山古墳	形態・規模・緑地	区画整理の形・ロータリーの必要性	文化財としての古墳	公園・ロータリー
C	津堂城山古墳	様々な墳丘の特徴	条里・城郭・果樹園・宅地化	陵墓参考地指定	綺麗な環境が残る

ていく。

**事例1「河内大塚山古墳」**は近世期には古墳は年貢地になり、濠は灌漑用に使用されていたこともあり、墳丘内にふたつの集落が形成されていた。しかし近代に入り陵墓参考地に指定されたことにより、墳丘内に存在した民家や神社は濠外へ退去させられる。この一連の流れから河内大塚山の、中世から近世にかけて生活・生産の場としての古墳から、再びモニュメンタルな古墳へと帰着した様が伺える。

**事例2「高塚山古墳」**は近鉄南大阪線によって切断された古墳である。近鉄線はそのルートを設定するに当たって古市古墳群中の大小8つの墳墓の連なる古墳列を横切らざるを得なかった。結局ルートはその隙間を縫うように通されるが、小ぶりな高塚山までは避けきれず、墳丘は切断される。その後、墳丘は消滅したものの、プラッ



写真1：高塚山古墳

トホームのコンクリート壁にその断面をトレースする形で残している。上表に列挙したこれらの各要素にはそれぞれ斥力が働いていることがわかる。

**事例 3 「応神天皇恵我藻伏岡陵陪塚・蕃所山古墳」**は宅地化の際、行われた同一の区画整理に応神陵陪塚はまるで公園のように、蕃所山はロータリーとして取り込まれた事例である。これらは古墳の転用事例と言え、そこには先の表に見られる三つの要素間に調和的な関係性が伺える。例えば、グリッド状に区画していく、近代における区画整理と応神陵陪塚の規模・方墳という形態、住宅地におけるロータリーと蕃所山の形態・規模は偶然にも一致する。そして古墳の緑（自然）は住宅地に嫌われるものではなく、むしろ好まれるものである。



図 1：古墳配置  
上写真 2：応神陵陪塚  
下写真 3：蕃所山

**事例 4 「津堂城山古墳」**は古代において、古墳の権威や規模が条里の侵入を避け、周囲を取り囲むように施工される。しかし中世になると墳丘は城郭の敷地となる。そして明治期になると、築城されたことにより封土の開墾した墳丘内は、その起伏を生かし果樹園として再び転用される。その後、墳丘一部が陵墓参考地に指定されたことに伴ってか、果樹園は衰退する。大正期には当時まだ、水田として機能していた条里遺構を避け墳丘内から古墳の外形に沿ってきれいに宅地化されていく。(写真 4) しばらくすると条里遺構もその機能を失い宅地化されていくことに伴い、墳丘の外形は現在に街路または水路として残っている。そしてわずかに残った墳丘は史跡指定され現在では住宅地の公園としての機能を果たしている。この一連の流れからわかるように、津堂城山は計画当初の機能を失っても、時代の変容に合わせて機能を変化させながら、現代に奥行きのある環境を残している。



写真 4：津堂城山古墳  
昭和 23 年撮

以上ここまでの分析をもう一度整理すると以下の三点に表される。

- 1) 事例 1 や古墳の消滅で見てきたように、ひとつの要素が働くと古墳はモニュメンタルに保護されるか、消滅する。
- 2) 事例 2 や事例 3 の分析からわかるように、古墳の都市化に影響を与える各要素には形や要求といった特性がそれぞれ備わっており、それらが

交わる際、引力や斥力が働くのである。そのような特性を持ったいくつかの要素の調整具合によって古墳は現在に曖昧な様相を現すのである。

- 3) 事例 4 では時代ごとの各要素が時間軸上で、その関係性を変えながら、重なり合い、古墳に本来備わっている性格を継承することで、現在に奥行きのある環境を作り出している様子がわかる。

## 5. 考察

ここでは、先ほどの分析で明らかになった、要素の関係性は古墳という事物の持つ、どのような性質から生まれてくるのかを考察していきたい。その手がかりとして、こうじ山古墳における消滅のプロセスを追っていくことにする。

こうじ山古墳は堺市の郊外に所在する、ニサンザイ古墳という大きな前方後円墳の陪塚の中で最大規模のものである。ところが 1954 年頃からある「男」が墳丘を破壊しはじめたのである。「男」は墳丘を崩してはせっせと砕土機にかけて壁土にして売っていた。

当時、古墳は文化財であるがために地価は非常に安かった。この「男」は一坪一円という神話的価格でこうじ山古墳を買っていたのである。約二年間古墳から作った壁土を売る商売は続き、墳丘がなくなった頃には、300 坪の宅地ができていた。まもなく「男」はその土地を一坪千円あまりで売却したという。

分析で見てきたように、初期目的を失った古墳に対する観察者の見方や捉え方は複数である。それは盛土をされた立体、緑、平面、断面などの古墳に本来備わっている要素と外的コンテクスト、あるいは社会的コンテクストとの様々な関係性において語ることができるからである。

こうじ山古墳の消滅における一連のプロセスはその点において象徴的である。戦後の復興期における壁土の必要性から、文化財であるがために価値の低い古墳を「男」は立体的な粘土層の塊として見出した。そして墳丘が失われた際、そこには平面としての古墳の側面が立ち現れ、宅地として機能するのである。つまり、それは複数の事物の集合体である古墳と観察者における捉え方の連続的な変化を示しており、そこに与えられる意味・機能も流動的である。

古墳は長いタイムスパンの中で日々このような変異を繰り返し、その時々のかたちとして現在に現われている。そして現在における一見無秩序で不定形な都市化された古墳は、実は秩序だった歴史的奥行きを感じさせると同時に、その場の環境に豊かさを与えてくれるものなのではないだろうか。

## 6. 結論

古墳という事物の持つ性質は初期目的が忘却された後に、その特異な形において連続的に派生する意味・機能であることが、都市化された古墳の背後に潜む要素間の関係性を見ていくことにより明らかに

なった。そして、それが古墳の都市化を引き起こす根本的なメカニズムであると考えられる。